

# 秀歌三十首十今年の収穫

中西由起子

死んだ男のうわさを少し 生き残れる者はみどりのアボガド食つて

十月号・佐佐木幸綱

蝶たちはどこにひそみてゐるのだらう枝打つ雨に避難指示あり

中村 佳文

鳥渡りくるころの空と思ひつつ点す目葉のひ

十一月号・伊藤 一彦

ひと粒の西瓜の種を飛ばしゆく真夏の息で鳴

原 ナオ

らす龍笛

ゴキブリを恰好いいねと子が言ひて不死身だ

永田 千奈

ものねと母が答へり

土蜘蛛の糸ひらく時音無しの見所にざつと風

十二月号・森屋めぐみ

渡りゆく

野兔のつぶらなる眼か山茱萸の実は紅々と実

和田 敏典

りたりけり

ヤマトンチューなれど地縁は浅からず泡盛の

瓶ぐいと握りしむ 一月号・晋樹 隆彦

君恋ふる信夫の山の柚子ひとつ風呂に浮かべて目を瞑りをり

本田 一弘

ピストルの乾いた音が獄扉に鋭く銜してリレー

十亀 弘史

始まる

どつちでもいいわと言っているうちに一人称

田中 和美

は淡くなりゆく

忙しなく掃除してぬしわが母はきまじめに散

らかず人になれり

二月号・高山 邦男

「代助は眩しさうに」とルビのあり江戸の光

の残る『それから』

細溝 洋子

犯罪とアートのあわいにくつきりとネズミは

黒い傘をさしおり

鈴木 陽美

朝霧夕べまた霧明暮の幻想のはざまに息をす

るもの

おずおずと生徒らは死を考える「城の崎に

三月号・青木 信

て」の第二段落 田中 拓也

白田坂なつかしきかな黒シャツの三島由紀夫

井関 輝美

は意外に気さく

冷笑も共感も受け一輪となりて立ちをりフラ

ワーデモに

四月号・大口 玲子

凍星の絶対零度の空の下ブラックアイスバー

ン光れり

菅野 彰一

飛ぶ鳥の影にためらうこともなくまず吠えて

みるテオの生き方

五月号・佐佐木朋子

古書といふ地曳き網もて手繰りたる明治大正

銀鱗を見す

峰尾 碧

ながながし夜の助っ人きみよりの大吟醸の百

黙を飲む

塩川 郁子

等身大・作りかけなる人形にラップをかけて

野原亜莉子

ポストまで行く

主語語尾のふらつく休業貼り紙の店よりぬる